池田嘉郎著『ロシア革命――破局の8か月――』

藤本健太朗

一　はじめに

本書は、一九一七年のロシア革命を、二月革命で政権を握った臨時政府が試みた政治制度の改革と挫折という視点から論じたものである。「はじめに」で、著者は「なぜ臨時政府は挫折したのか」「なぜボリシェヴィキは成功したのか」という問いを提起し、その答えを端的にいえば、「ロシアの民衆に臨時政府の言葉は届かなかったのであり、ボリシェヴィキの言葉は届いた」ということである、と提示している。それに続く第一章から第九章では、特に臨時政府の政策過程に着目して、大まかな年代順に各アクターの動きに関する事実関係を整理している。

「おわりに」では、「はじめに」で提起した問いに対して、より具体的な答えを次のように提示する。つまり、帝政末期からロシア社会に潜在していた社会的上層「公衆」と下層「民衆」の断絶、各社会勢力・階層間の利害を調整する議会の不在、という二つの構造上の問題を背景とし、第一次世界大戦を契機として社会下層が政治参加を求めて蜂起したものが、二月革命である。しかし、この革命を受けて成立した臨時政府は、上層のみで構成されており、彼らは下層との利害を調整しようとするが、下層が最も望んだ戦争終結を約束できなかった。その上、下層を暴力で押え込んで自らの政策を遂行するまでの強力な意思を持っていなかった。結果として、上層でありながら、戦争を終結させることを明言し、その一方でいざとなれば下層を暴力で抑え込むという強い意思を持っていたボリシェヴィキが、ロシア革命における成功者となった、と著者はまとめている。

そして、ロシア革命は、単に帝政が破壊され臨時政府が破局する過程だけでなく、臨時政府が目指した「私的所有権が社会に根をおろし、各社会層の経済的利害が諸政党によって議会で調整され、そうした制度のなかで言論の自由や人心の不可侵も、より実態をもつ」という西欧的政治制度を定着させる試みが破局した過程であると結論づけ、この破局によって生じた課題は現代ロシアでも残存するとともに、世界中で形を変えて現れている、と結んでいる。

二　本書の位置付け

著者は近年のロシア革命研究における二つの大きな潮流を意識している。

その一つは、十月革命より二月革命を積極的に評価し、二月革命を構造的に、あるいは臨時政府を制度史的に理解しようとする潮流である。

ソ連時代のロシア革命研究は、ソ連国内はもちろんのこと、「西側」諸国においても、革命を経てボリシェヴィキが成立させ

たソ連という存在を念頭に置き、十月革命を研究の中心に設定したため、二月革命はその前提として語られるに過ぎなかった（著者のいう「十月革命クライマックス史観」）。E・H・カーや長尾久がその一つの到達点にいたと言える。

しかし、ソ連崩壊後、ロシア人研究者を中心に、二月革命を重視したロシア革命の再検討がなされてきた。ロシア人研究者では、V・ブルダコーフ、A・ニコラーエフなどがその代表であり、日本では後述のように和田春樹が世界に先駆けてこの視点を提起してきた。

もう一つの潮流は、ロシア革命を、社会主義の隆盛という二〇世紀の世界史的現象の一部として一般化するのではなく、ロシアに特有の個別事象として論じ、他の革命（例えばフランス革命）と比較した際の特異性を明らかにしようとするものである。具体的には、「国民形成」や「帝国」という観点から、ヨーロッパの他国史と比較可能なロシア史の一部として、ロシア革命やソ連を捉える研究である。J・サンボーンなどがその代表である。

著者はこの二つの潮流の中にいて、自他ともに認めるフロントランナーの一人として、これらの問題に積極的に取り組んできた。

一方、特に日本の非専門家は、この二つの研究動向をあまり認識していない現状がある。著者は、研究者と非専門家のこの認識の相違を解消することを目的の一つとしている。一般の読者には新書という形でロシア革命の新たな見方を提示し、研究者に対しては、二月革命や臨時政府の政治過程に着目することによって、ロシア革命研究の新たな視点を提示している。[1]

三　本書の特徴と意義

著者は、ロシア革命期におけるロシア社会の重要な特徴として、社会上層と下層との亀裂を指摘する。その上で、この亀裂にどのような対応を取ったのかという観点から、臨時政府の政策とその決定過程を検討し、それと対比させて、その時々のボリシェヴィキの動きを整理している。

従来の研究は、下層に着目し、ブルジョワ革命であった二月革命後にその亀裂を突破して政治権力を獲得すべく蜂起した民衆と、それを指導したボリシェヴィキ、という構図で、ロシア革命を叙述してきた。

和田春樹は、下層に着目しながらも、ボリシェヴィキの指導の事実を否定し、二月革命から始まる下層の革命志向が、十月革命で完成したのだと指摘した。彼が提示したのは、臨時政府とボリシェヴィキが下層の革命志向を利用しようとしたが、臨時政府は下層からの戦争終結の要求を満たせず十月革命において拒絶され、代わって権力をとったボリシェヴィキは事態の収拾のため強権政治を開始した、という構図である。[2]

一方、著者は二月革命から十月革命までの経緯を上層の視点から再検討し、帝政、臨時政府、穏健社会主義政党が上下層間の亀裂を克服できなかったために政権を失うこととなった、という構図を提示している。その上で、従来のように下層である民衆がどのようなことを要求したかではなく、上層である臨時政府が民衆に対してどのように対峙しようとしたかに視点を転換する。そうすることで、ロシア革命の新たな一面を、一般読者にも分かりや

すく整理した点で、本書は大きな意義を持っている。

臨時政府の目的は、西欧近代的な社会政治制度をロシアにも根付かせることであり、それは民衆が自律的に考える「市民」、つまり上層と同様の政治意識を持った存在になることが前提であった。当初はその前提の上に立って西欧的制度を導入したが、民衆の要求が社会変革ではなく戦争の終結のみにあることを知ると、ミリュコーフら一部のメンバーは民衆の無理解を嘆いて政権を去った。残ったケレンスキーらは、利害の調整によって民衆を制度下に組み込むことを試み始めたが、民衆の支持をいち早く摑んだボリシェヴィキによる十月革命により挫折した。このような、従来は軽視されがちであった臨時政府側の態度の変遷を、本書は分かりやすく整理している。

また、第七章におけるコルニーロフ反乱の経緯についての解釈は、同様に視点を転換することで初めて明らかになったものである。

従来、コルニーロフ反乱とは、社会主義政党との連立政権となった臨時政府（特にケレンスキー首相）に反発したコルニーロフがクーデターを試み、それに対して無力であったケレンスキーに代わって、ボリシェヴィキが反乱を鎮圧し、勢力を急激に躍進させた、と言われてきた。しかし、本書では、ケレンスキーとコルニーロフは協定を結んでおり、相互に侵害する意図はなかったが、強引に両者の「仲介」に立とうとしたリヴォフの誤解によって、相互に疑心暗鬼が生まれ、それがきっかけでケレンスキーはコルニーロフの動きを「陰謀」と誤認した。結果として、ボリシェヴィキがそれを利用して勢力を伸ばすきっかけとなった、と述べられている。

これはまさに、臨時政府内部の各アクターの動向を詳細に解明することなしには成し得なかった解釈であり、従来の説とは大きく異なる。

このように、著者は臨時政府に関する事実の解明を重ねることで、新たなロシア革命像を、説得力をもって描写している。

さらに、一九一七年段階のボリシェヴィキ内部におけるスターリンの立ち位置が垣間見えることも興味深い。

それは、第九章の、十月革命直前に起こったレーニンとカーメネフ・ジノヴィエフとの対立を叙述した箇所によく表れている。武力蜂起を推進するレーニンが、それに反対する両者を党から除名しようとした際、当時党の機関誌『プラウダ』の編集を担当していたスターリンが同誌において「われわれは皆同じ考えの持ち主である」と主張し、暗に二人を庇護した。著者はスターリンの言動を「党内のそれなりに広範な気分を反映してのものであっただろう」と推測している。

その後、スターリンは周囲の「調整役」を演じることで党内における地位を確立し、人事を司る書記長に任命された。このような政治的立ち回りが一七年から既に始まっていた、という指摘は、特に一般読者には新しく、非常に興味深い。

また本書の末尾では、二一世紀の現在にロシア革命を再考する意義が語られている。「はじめに」にある通り、ロシア革命はその結果生まれたソ連という社会主義国家、あるいは二〇世紀という時代との関連で論じられることが多かった。しかし、社会が新しい環境に置かれたときの変化という視点で一般化した際に「ロ

シア革命はむしろ今日、現在性をいやましにましているのだ」との指摘は、ロシア革命研究の新たな視座として重要であろう。

四　本書への批判

本書における最も大きな問題点は、二月革命から十月革命に至るまでの過程を分析する際の問題意識が、結論において矮小化されている、という点である。

前述の通り、臨時政府の最終目的は議会を通じてロシアに西欧的政治制度を定着させることであり、そのために政権を維持する必要があった。しかし十月革命で臨時政府は政権を失い、結果として西欧的政治制度も実現されなかった、ということを、著者は「臨時政府の挫折」と表現している。

「おわりに」でその原因を分析するにあたって、著者は、「戦争を継続したままで民衆の要求を満たすのは無理であった」という前提に立っているが、その根拠を示していない。もちろん、二月革命における民衆の要求の一つが戦争の終結であったことは事実であるが、そこから著者がそのような前提に立ったとすればやや論理が飛躍している。一方で、臨時政府のメンバーがそのような前提に立っていたということも明示されていない。

また、臨時政府、特にリベラリスト達が目指した政策の方針は、戦争を継続させながら、ロシアに西欧的政治制度を根付かせるため、ロシアの社会下層を皇帝に隷属する「臣民」ではなく、自立的に政治参加する「市民」に変えることであった。この方針は穏健社会主義者との間で共有されていたと著者は指摘する。

社会下層から戦争終結と民衆の待遇改善を要求された臨時政府は、戦争を継続する代わりに民衆の待遇改善を重視する政策を模索し、それでも下層の不満が収まらないことを受けて、戦争への参加を縮小していった。これはまさに、著者が「おわりに」で述べる、政策と各階層間の西欧的な利害調整の萌芽であり、本論は臨時政府がその調整を最後まで試みたことを明らかにしている。そしてその試みが成功する前に、十月革命の発生によって臨時政府は挫折した。

したがって、「戦争を継続したままで民衆の要求を満たすのは無理であった」というのは結果論であり、結論において著者がそれを前提として、「戦争の早期終結」または「民衆への弾圧」を選択できなかったことが臨時政府の挫折の原因である、と分析するのは表面的である。

本論を読む限り、臨時政府の政策が成功しなかった原因は、彼らが政治の基本方針として西欧型の政治体制に固執したことで、その体制が形骸化してしまったからだと考えられる。基礎となる社会制度や民衆の政治意識が未成熟なままで、強引に西欧型の政治体制を導入しようとした結果として、臨時政府と民衆との間に軋轢が生じたことが、本論でも述べられている。戦争継続に関する迷走やボリシェヴィキ弾圧の不徹底さなどの具体的な政策選択は、そのような状況の結果として生じたものである。

また、著者は、ボリシェヴィキと対比させ、臨時政府が民衆の要求に対して「柔和であった」と評価している。しかし、このように結論づけるのであれば、「はじめに」で設定した臨時政府の「苦闘と、挫折に至る過程」が分析されたとは言えないのではないだろうか。

同様の問題点が、ボリシェヴィキの政治を分析する上でも存在する。「おわりに」で著者は、ボリシェヴィキの成功の理由として、「西欧諸国の政府との関係を断ち切ってもよいと考えるほどに、彼らはあたらしい世界秩序の接近を確信していた。そして、いざ政権を獲得してからは、躊躇なく民衆に銃口を向けることができるだけの過酷さをもっていた」と分析している。

しかし、本論を読む限り、一九一七年にボリシェヴィキが支持を拡大した、より根本的な原因は、レーニンとトロツキーの宣伝活動の手腕であったと考えられる。特にレーニンは、いつ、何を、どのように宣伝すれば人々の支持を得られるかを感じ取り、自らの目的を果たすため上層・下層にかかわらず宣伝を行う才能を持っていた。そのことは本論の随所に述べられており、第四章では「レーニンとトロツキーはロシア革命の傑出した指導者であった」と評価されている。戦争の終結自体はレーニンの政治理論に基づく政策であるとしても、レーニンがそれを大々的に発表したのは、あくまで民衆への宣伝の一環である。

以上のように本書では、著者が最も強調したかったであろう「ロシア革命を西欧的民主主義社会実現への試みとその挫折として捉える」という課題が、結論において単なる政策の選択問題に矮小化されている。

それは、著者が「はじめに」において、臨時政府とボリシェヴィキの政治過程を必要以上に対比させる構造を提示したことで生じたものである、と考える。確かに、戦争の継続を標榜した臨時政府と、終結を宣言したボリシェヴィキとで、後者が民衆の支持を得たのは確かである。それは前述の通り、両者の目的も手法も異なる政治手法によって生じた結果であるが、その政治手法を生み出した原因について、結論では十分な分析がなされていない。

臨時政府による西欧的政治制度の実現の試みと、ボリシェヴィキによる社会主義体制建設のための運動の推移は、重なる部分はあるが別事象である。本論で臨時政府の政策を中心に検討し、その挫折の原因を結論で提示するのであれば、その背景と具体的政策との間にある、臨時政府の政治の構造的な側面により着目した分析を明示すべきではなかったか。また、ボリシェヴィキに関しては、臨時政府と対比させるのではなく、臨時政府の政策にどのような影響を与えたかという視点で分析を試みるべきではなかったか。

さらに、臨時政府とボリシェヴィキを必要以上に対比させることのもう一つの問題点は、十月革命を「臨時政府の挫折」と対比して「ボリシェヴィキの成功」としている点である。

ボリシェヴィキの目的はロシア（あるいは世界）で社会主義体制を確立することであり、そのためにはまずボリシェヴィキが主導する革命によって帝政あるいは臨時政府が打倒され、その後ボリシェヴィキが主導する体制の構築がなされる必要がある、と考えられた。率直に考えれば、この構想をそのまま実現することが、「ボリシェヴィキの成功」であろう。

しかし、十月革命によって臨時政府が打倒された後の憲法制定会議選挙でボリシェヴィキはエスエルに敗北し、主導権を握るために議会においてもう一度クーデターを決行した[③]。その後、ボリシェヴィキは苛烈な内戦と世界革命の挫折を経験し、政権の維持を自らの第一目的に転換した。そしてそれは二〇年代にスターリ

ンの一国社会主義へと受け継がれていく。つまり、これも従来から言われてきたように、十月革命はボリシェヴィキの活動の一次的な成果ではあるが本質的な成功ではなく、ボリシェヴィキの「成功」とはそもそも幻想だったのではないか。

スターリン政権以降、十月革命がボリシェヴィキの成功として語られてきたことは、第二節で述べたとおりである。本書は「十月革命史観」からの脱却を目指していながら、十月革命を無批判に「ボリシェヴィキの成功」としているが、本書を読む限り、そうすることに、臨時政府と対比する以外の意義があるようには思えない。無理に対比構造を示さず、またボリシェヴィキの政治の分析に踏み込まずに、臨時政府から見た十月革命像を結論で提示すべきではなかったか。

細部の批判として、二点を指摘したい。まず一点目は、臨時政府が戦争への参加をめぐって、ロシアの社会下層と上層及び連合国との要請の間で板挟みになっていた、ということが主要な論旨の一つであるにも関わらず、臨時政府が外交上置かれていた立場や、それに対して取ろうとした政策の推移についての分析が不十分な点である。

本書で叙述される臨時政府の外交は以下の通り概略できる。一七年五月まで外相を務めたミリュコーフは、英仏露間で交わされたオスマン帝国の勢力圏分割をめぐる秘密協定を重視し、戦争の完遂にこだわって、ペトログラード・ソヴィエトなどに反対され、最終的に辞任した。その後、首相のケレンスキーはロシアの参戦意欲を示すために軍の再編に尽力し、いわゆる七月攻勢を仕掛けるが失敗した。九月には、軍を後退させ、イギリスのロイド＝ジョージに対して一八年の連合国の全面的軍事攻勢に参加できないと通知した。

ロシアが戦争から撤退できない事情について、本書では「革命ロシアが連合国との約束に縛られていることは、簡単には覆しようがない現実であった」としている。これは著者による当時の状況の分析であるが、当時のミリュコーフらそれぞれのアクターが、連合国との約束にどの程度「縛られている」と判断していたのか、そしてその判断は何を根拠になされていたのか、分析が必要であろう。

また、右の経緯から、臨時政府は成立以後、外形的には戦争参加への態度を徐々に後退させたことが推察される。特に、九月のロイド＝ジョージへの通知は、それまでの方針の一部転換とも捉えられるものであり、それに対するイギリスをはじめとする連合国の反応の分析は、臨時政府の外交政策を考慮する際に重要だが、本書はその点に関する分析がない。

二つ目は、臨時政府の大臣やその関係者にフリーメーソンが多かったことに言及する一方で、それが臨時政府の政治にどのように影響したか検証されていない点である。

臨時政府にフリーメーソンが多かったこと自体は、和田などが既に言及している。本書ではそこからさらに踏み込んで、フリーメーソン同士の横のつながりにより、臨時政府が政党の枠を超えて連立することが可能になったことを指摘し、臨時政府の人事や政策の決定にフリーメーソン同士のつながりが影響を与えていた可能性までを示唆している。この点で、本書は従来の研究を押し進めたと言える。

例えば本書では、フリーメーソンであるケレンスキー、ネクラーソフ、テレシチェンコの「三人は、政府内政府のような核を構成しており、中道―左派連合路線を推し進めようとしていた。フリーメーソンではないミリュコーフには、三人が何らかの同盟関係にある以上のことは分からなかった」として、ミリュコーフがフリーメーソンでなかったことが、後のミリュコーフ辞任に繋がる臨時政府内の不和の一因だと示唆している。

しかし、フリーメーソンリー（ロシアではマソンストヴォ）自体、未解明な部分の多い結社であり、その会員同士がどれほど交流を持っていたかも不明な部分が多い。また一般論として、フリーメーソンに限らず特定の集団に属しているかどうかによって、対人関係における親密さは変化し得る。

したがって、臨時政府の大臣や関係者がフリーメーソンであったことを強調するには、それぞれの親密さ以上の政策や人事における影響を、より具体的に提示すべきではなかったか。

五　おわりに

著者が、臨時政府の政治という、ロシア革命研究における大きな未開拓分野の一部を解明したことは明らかである。しかし、前述した臨時政府の外交政策や、連合国をはじめとする諸外国の臨時政府への態度、臨時政府とボリシェヴィキの活動の相互関係の分析など、未解明の課題は多い。

これらの課題を検討することで、二〇世紀論やソ連史研究にしか結びつかないような従来のロシア革命観を超えて、現代の諸問題に通じる「社会変革」自体を考える際の重要な視点を提示することが可能になる、と著者は示唆している。

さらに、先行研究で明らかになっている事実関係が包括的に整理されているだけでなく、今後の研究者が従来の見解を見直すためのきっかけとして非常に刺激的であるという点でも、本書は参照に価する。今後の研究の進展に期待したい。

① 著者が様々な場で語っているように、著者が責任編集した『ロシア革命とソ連の世紀　第1巻　世界戦争から革命へ』（岩波書店、二〇一七年）は、ブルダコーフ、ニコラーエフらも寄稿するなど、本書と相互補完の関係になっている。特に、本書の研究上の位置付けや問題意識については、著者が著した本論集の「総説」を併せて読むと、理解がより深まるだろう。

② 和田がこの議論を初めて提起したのは、論文「二月革命」（江口朴郎編『ロシア革命の研究』（中央公論社、一九六八年）三二一―四五四頁）である。和田はこの論文の議論をさらに進め『ロシア革命　ペトログラード　一九一七年二月』（作品社、二〇一八年）を発表した。

③ 和田春樹は前掲書においてロシア革命を「二月革命」「十月革命」「レーニンの第三革命」の三段階に分類している。

（岩波新書　xiv＋二三二＋四頁
二〇一七年一月　八四〇円＋税）

（日本学術振興会特別研究員）